

第 40 回国際経済協力セミナー

私が見た JICA の国際協力～コンゴ民主共和国の現場を体感して～

講演者：高橋歩氏

独立行政法人 国際協力機構

文責：森下友香子

草案作成：坂元梨沙

〈高橋歩氏 略歴〉

2008 年 3 月 東京都立戸山高等学校 卒業

2008 年 4 月 東京外国語大学外国語学部欧米第二課程フランス語専攻(当時) 入学

2012 年 3 月 国際協力特化コース宇野ゼミ 卒業

2012 年 4 月 独立行政法人 国際協力機構 入構

2012 年 4 月～6 月 アフリカ部アフリカ第四課(国内 OJT)

2012 年 7 月～9 月 コンゴ民主共和国事務所(海外 OJT)

2012 年 10 月～ アフリカ部アフリカ第四課

高校生時代の授業でアフリカは「暗黒大陸」と呼ばれていたと知り、アフリカに興味を持ち始めたことをきっかけにフランス語専攻に入学。大学ではアフリカについて幅広く学び、「日本の良さを世界に伝えたい」という思いから JICA に入構。現在、ブルキナファソ、ベナン、トーゴの主担当とコートジボワール、ニジェールの副担当を務める。

〈JICA とはどのような機関か〉

JICA は日本の ODA 実施機関として、二国間援助の 3 つの手法である「技術協力」「有償資金協力」「無償資金協力」を一元的に担っている。技術協力では開発途上国の人材育成や制度構築が目標とされ、その例として専門家の派遣、必要機材の供与、日本への研修員受け入れなどがあげられる。有償資金援助は一定以上の所得水準を達成している開発途上国に開発資金(円貨)を貸し付けるものであり、現在アジアやアフリカ南部が主な対象となっている。無償資金援助では、所得水準が低い国を対象として返済義務を課さずに開発資金を供与し、資金は基礎インフラ整備や医薬品などの調達に充てられる。

またこの他にも、海外で大規模災害が発生した場合に被災国政府からの要請で行われる国際緊急協力や、市民参加協力の一環として青年海外協力隊の派遣や NGO・自治体・大学との連携事業を行っている。

これらの援助における現在の問題点としては、まず所得水準が向上して ODA から自立する国の増加や円・ドル交換の際のロスを背景として、有償資金援助を受ける国が減っていることが挙げられる。これを受け現在 JICA では円貨貸与ではない資金援助の方法を探っている。また、無償資金援助は日本経済状況の悪化の影響を受けており、最悪の場合は相手国の支援要請を断らざるを得ないという状況に陥っている。

〈JICA 本部での業務〉

本部アフリカ部での活動は大きく分けて「支援を行う国を視る」「現場の在外事務所をサポートする」「国内も現場であるとの考えに則って活動する」の3つに分けられる。「支援を行う国を視る」とは、対象国がどんな国で、何が課題であるのかを知り協力方法を考えるために、経済学や人間開発指数といった指標を通して研究することである。「現場の在外事務所をサポートする」業務においては、現場のニーズを在外事務所から本部へ伝達・共有し、現場での事業が円滑に行われるようにサポートしている。「国内も現場であるとの考えに則った活動」では、省庁・JETRO・在京大使館・民間企業など支援を行うにあたって関係のある各アクターとの調整や日本の人々にアフリカを伝える活動を行う。



〈コンゴ民主共和国在外事務所での業務〉

在外事務所においては主に4つの視点からコンゴ民主共和国を支援している。

1つ目は「平和の定着」であり、この一環として警察研修が行われている。
2つ目は「社会サービスへのアクセス改善」である。この視点からは、看護師や助産師などの保健人材の育成と彼らの各地域への適切な配置や安全な飲料水の確保などが行われている。3つ目は「経済開発」で、インフラ整備や職業訓練がこれに含まれる。特に職業訓練はセネガルでの第三国研修を実施するなど南南協力の一面を持つ。4つ目は「環境保全」の視点で、ここではコンゴ盆地の森林保護が重要な活動となっている。

また JICA では「マクロ的(=国を見る)視点」「ミクロ的(=課題を見る)視点」「日本ベースの視点」「相手国ベースの視点」を国際援助に大切な4つの視点としており、コンゴ民主共和国での支援もこれらに基づいて行われている。

〈質疑応答〉

Q. 「人間の安全保障の実現」を掲げているが、いったいどの程度のレベルまでの「安全」を保障するのか。

A. これは前理事長の緒方貞子氏のポリシーであり、組織内での疑問の一つでもある。私のとらえ方としては、生活を脅かしている問題を解決して人が人として生きていけるレベルを目指しているのだと考えている。自分が生きていくのに最低限何が必要かを考えて、それらを保障するのだととらえてもらえると分かりやすいと思う。

Q. JICA で活動を行っていて、やりがいを感じるのはどんな時か。

A. コンゴ民主共和国では中国による大規模な道路建設などが行われているが、大規模な配慮不足や質の低さが目立つ。それに対して日本は支援において非常に細かなところまで配慮を忘れず、また建築基準が厳しいため質も良い。このような部分が国民にも認められていて感謝されることも多く、そんな時にやりがいを感じる。

Q. 在外事務所ではどのようにして現場の細かい情報を得るのか。

A. 街へ出て自分の足と目を使って情報を得ることが多い。市民との対話から、一般市民が何を必要としているかを調べている。またコンゴ民主共和国は新聞大国であるので、気になったトピックについて現地スタッフに尋ねたりもする。他には、連携している警察から情報を得たり、大臣と会って国内外の情勢を聞いたりすることもある。

Q. 大学で4年間学んだだけでどうしてフランス語で業務が行えるのか。フランス語をどのように学んだのか。

A. 大学では「自分の興味のあることを中心に学ぶ」というスタンスだったので、1、2年生で基礎を一生懸命やり、3、4年ではフランス語のラジオを聞いたりアフリカ関連の新聞記事をフランス語で読んだりしていた。就職してからも仕事後に勉強しているし、業務上使わざるを得ない状況のため上達したように思われる。

Q. JICA に入ったきっかけとして「日本の良さを伝えたい」ということがあったが、どのようなアプローチでこの目標を遂行しようと考えているか。

A. 先ほどの道路整備でも言ったように、日本人の丁寧で細かいところまで気を配った支援を行うことが日本の良さを伝えることにつながっていると思う。また5S(=整理・整頓・清掃・清潔・躰)は日本にとっては当たり前のことであるが海外では当たり前でないことが多く、これらを導入することで仕事のミスを減らしたりできる。このようなこと1つ1つが日本の良さを伝えるためのアプローチになっているのではないかと思う。

今回の講演では高橋氏自身の体験を交えた活動紹介が行われ、学生たちは JICA の活動についてより深い理解を得られたと思われる。さらに高橋氏が講演の最後に語った「語学はあくまでツールであり、それを何に使うか考えることが重要である」との言葉は学生が改めて自らの語学に対する姿勢を考え直すきっかけになったに違いない。質疑応答も盛んに行われ、また授業後質問に行く学生の姿も多く見られたことから、今回の講演は国際協力に関心のある学生の興味を大いに掻き立てるものであったことがうかがえる。

